

第4節 持続可能な社会を支える人づくり

〈主な指標と最新実績〉

動く環境教室受講者数	5,373人
環境アドバイザー登録者数	336人
森林環境教育参加者数（県主催）	3,016人
森林環境教育指導者数	117人

第1項 環境学習の推進

1 動く環境教室の推進 【環境政策課】

「動く環境教室」は、環境学習に必要な機材を搭載した移動環境学習車「エコムーブ号」と、県が育成した環境学習サポーター（講師）が小中学校等に出向き、水、ごみ・リサイクル、温暖化、SDGsのテーマに、実験や体験活動を交えながらわかりやすく環境について学ぶことができます。

地球温暖化をはじめ、水の汚れなどを調べるほか、リサイクルに関する教材でごみの分別を体験しています。

2024（令和6）年度は、第24回ぐんま環境フェスティバルなど様々なイベントにも出展しました。

表2-2-4-1 動く環境教室開催状況

年度	R2	R3	R4	R5	R6
件数	59	45	73	84	89
人数	3,182	2,283	3,425	3,796	5,373



動く環境教室の様子

2 環境学習サポーターの育成 【環境政策課】

環境学習サポーターは主に「動く環境教室」において講師を務めます。

「動く環境教室」の幅広い学習分野の知識を習得するための座学や、子どもたちの興味を引きつける話し方、学習の流れを踏まえた実験の仕方など、体験的な学習を行動へ結びつけさせるための研修を行っています。

また、「ぐんま環境学校（エコカレッジ）」において、「動く環境教室」の実習をカリキュラムに組み込み、環境学習サポーターの育成を行っています。

初代エコムーブ号を導入した2001（平成13）年度から「動く環境教室」を開始し、2003（平成15）年度から環境学習サポーターが講師を務めており、2024（令和6）年度は42名の方を環境学習サポーターとして登録しています。

表2-2-4-2 環境学習サポーターの人数（単位：人）

年度	R2	R3	R4	R5	R6
人数	54	45	38	41	42

3 ぐんま環境学校（エコカレッジ）の推進

【環境政策課】

環境学習や地域の環境活動に自ら進んで取り組むことができる人材を養成するため、環境問題に関連する幅広い分野のカリキュラムによる「ぐんま環境学校（エコカレッジ）」を実施しています。

2024（令和6）年度は、6月から12月にかけて講義やワークショップ、フィールドワークを実施しました。受講者は、SDGsや気候変動、環境学習、「ぐんま5つのゼロ宣言」、廃棄物対策などに関する講義や、森林ボランティア体験会を通して、知識を深めるとともに今後の活動への意欲を新たにしました。

修了者は、原則として群馬県環境アドバイザーに登録されるとともに、「動く環境教室」の環境学習サポーターとして活躍している方もいます。

2025（令和7）年度も事業を継続し、講師や受講生相互の交流の場を設け、横のつながりを築けるように配慮しながら、環境活動に自ら進んで実践できる人材を育成していきます。



講義の様子

表2-2-4-3 修了者数の推移 (単位：人)

年度	R2	R3	R4	R5	R6
修了者数	0	15	8	10	34

(注)2020（令和2）年度は、37人の受講者がいましたが、新型コロナウイルス感染症の影響で講義を変更や中止したため、修了証を交付しませんでした。

4 環境アドバイザーへの登録、活動支援

【環境政策課】

環境保全活動の地域リーダーとして活躍する人材の育成・支援のため、1992（平成4）年度から群馬県環境アドバイザー制度を設けており、2024（令和6）年度末現在336名の環境アドバイザーが県に登録し活躍しています。

【環境アドバイザーの活動概要】

環境ボランティアとして、環境美化活動、地球温暖化対策、ごみの減量や再生可能エネルギー等、様々なテーマで活動しています。

1999（平成11）年度から環境ボランティアに委託している「地域環境学習推進事業」も、主に環境アドバイザーが企画・立案・実施をしています。

また、環境アドバイザー相互のネットワーク作

りのため、1997（平成9）年度に「群馬県環境アドバイザー連絡協議会」を設置しました。役員会・幹事会を随時開催し、重点活動内容について協議するとともに、会報「グリーンニュース」の発行、専門部会・委員会（ごみ問題、温暖化・エネルギー、自然環境、広報委員会）の運営、地域ごとに活動する地域部会など「行動する環境アドバイザー」をスローガンに専門性を伸ばしながら、アドバイザー同士のつながりを意識した活動に取り組んでいます。

2024（令和6）年度には、環境アドバイザーが企画・運営して環境フォーラムを開催しました。各々がプレゼンテーション形式やポスター掲示形式により環境活動の事例を発表するとともに、断

家による循環型社会に関する落語講演を開催し、環境アドバイザー同士の交流を図りました。

表2-2-4-4 群馬県環境アドバイザー登録者数の推移 (単位:人)

年度	R2	R3	R4	R5	R6
登録者数	297	306	360	375	336

5 こどもエコクラブへの支援 【環境政策課】

こどもエコクラブは、幼児から高校生までなら誰でも参加できる環境活動のクラブです。一人以上の子どもと、子どもたちをサポートする一人以上の大人でクラブをつくることができ、県がこのクラブの活動を支援しています。

1995(平成7)年から環境省のバックアップのもと全国で取り組まれており、2011(平成23)年度から公益財団法人日本環境協会が運営し、毎年全国大会も開催されています。群馬県では1996(平成8)年からこどもエコクラブが結成されています。2024(令和6)年度の登録状況及び事業状況は次のとおりです。

2024(令和6)年度こどもエコクラブ「全国エコ活コンクール」の壁新聞部門に応募しました。そして、2025(令和7)年3月23日(日)に大阪アカデミア・大阪府咲洲庁舎(大阪府)で「こどもエコクラブ全国フェスティバル2025」が開催されました。

表2-2-4-5 群馬県内のこどもエコクラブの変遷

年度	R2	R3	R4	R5	R6
クラブ数	44	41	96	152	164
メンバー数	1,003	762	1,077	1,161	1,279

2024(令和6)年度の登録状況

- クラブ数 164クラブ
- 会員数 1,279名
- サポーター 422名

ア 群馬県こどもエコクラブ学習会

2024(令和6)年8月31日(土)にサンデフォレストで「おもしろ体験してみ隊」と題した県内エコクラブ合同の学習会を開催予定でしたが台風10号接近のため中止となりました。

イ 群馬県こどもエコクラブ交流会

2025(令和7)年1月11日(土)に前橋市児童文化センターで交流会を開催しました。各クラブによる活動発表や壁新聞の掲示、科学工作教室を行い、クラブ間の交流を図りました。

ウ 壁新聞の全国コンクールへの応募

県内3つの団体(イオンチアーズクラブ高崎(高崎市)、イオンチアーズクラブ太田(太田市)、前橋市児童文化センター環境冒険隊(前橋市))が交流会で壁新聞を掲示し、うち1団体が



交流会の様子



イオンチアーズクラブ太田の壁新聞

6 ぐんま緑の県民基金事業(森林環境教育指導者養成) 【林政課】

自然の解説者である「緑のインタープリター」を養成し、森林や緑とふれあう様々な自然体験活動を通して人間生活や環境と森林の関係について理解を深め、緑豊かな郷土づくりを推進します。

養成した緑のインタープリターは、小・中学生

を対象にしたフォレストリースクールや緑の少年団育成事業、ぐんま緑の県民基金事業の市町村提案型事業、森林観察会・自然講座などの森林環境教育の場で活動しています。

7 小・中学生のためのフォレストリースクール 【林政課】

県内の小・中学校の児童・生徒を対象に、森林や緑化の重要性を認識し、森林保全や環境保護への意識を高めるため、緑のインタープリターを派遣しています。講師は近隣の里山の自然観察や林業体験、校庭の樹木を生かした自然体験ゲームや

自然工作等を実施して、学校の授業を支援しています。

表2-2-4-6 フォレストリースクール参加者数 (単位:人)

年度	R2	R3	R4	R5	R6
参加者	1,407	2,086	2,810	3,097	3,016

8 緑の少年団育成 【林政課】

緑の少年団は、緑に親しみ緑を守り育てるなどの活動を通して、自然を愛し人や社会を愛する心豊かな人間に育てることを目的に、県内の小学校を中心に組織された団体で、現在313団体、約5万人の子どもたちが活動しています。

学校林の整備や森林の学習会、地域の施設へのプランターの寄贈や清掃活動等、学校や地域の実態に応じて様々な活動が展開されています。県では広くこの活動を支援し、森林環境教育を推進しています。

9 環境教育に係る教科等の優れた実践事例の蓄積と普及 【(教)義務教育課】

(1) 環境教育の実践事例の蓄積

各学校で環境教育の充実を図るためには、各教科、特別の教科道徳、総合的な学習の時間及び特別活動等それぞれの特質に応じて、児童生徒、学校、地域の実態を踏まえながら環境に関する学習が行われるようにすることが重要です。

そこで県教育委員会では、特に小・中学校において、系統的な取組ができるよう、環境教育全体計画の作成、見直しをお願いしています。

また、県内の環境教育の特色ある取組を広く紹介するため、環境教育実践事例集「みんなの環境わたしたちの実践」を毎年2月に作成し、県総合教育センターのWebページに掲載しています。この実践事例集では、小、中、高等学校の優れた取組を1校ずつ紹介しています。

(2) 専門的な知識と指導力を備えた教員を養成する環境教育研修

今日、環境問題を解決し、持続可能な社会を構築していくためには、子どもたちの環境に対する意識を高め、一人一人が環境に配慮した行動をとれるようにしていくことが重要です。

そのため、県教育委員会では、国が主催する環境教育に関わる研修等の紹介や、総合教育センターにおける研修講座の実施を通して、環境教育に関する専門的な知識と児童生徒への指導力を備えた教員を養成し、各学校で環境教育・環境学習を普及・推進できるようにしています。

10 教員向け研修講座(環境教育研修講座)の実施 【(教)総合教育センター】

県では、各学校で環境教育を効果的に推進できる教員を育成するため、全校種の教員を対象に「見る・触れる・体験する環境教育研修講座」を実施しています。2024(令和6)年度は、7月に尾瀬国立公園の豊かな自然環境を五感で体験し、その多様な生態系の理解を深めることを目的として開催しました。また、尾瀬国立公園の保全のため、長年に渡り取り組んできた自然保護活動の具体的な手法を学ぶことで、教員が学校現場で実践できる環境教育の視点と、地域と連携した教育活動の可能性を探る機会と位置付けました。参加者は12

名でした。

当日は鳩待峠から入山し、ブナの原生林を抜け、多くの高山植物・湿原植物が咲く山の鼻ビジターセンターの研究見本園を經由し、雄大な尾瀬ヶ原へと足を進め、湿原の生態系を観察しました。

研究見本園や尾瀬ヶ原では、この時期にしか見られないニッコウキスゲやヒツジ草などの群落を間近で観察し、その生育環境や尾瀬の生態系における役割について解説を受けました(図1)。特に、湿原植物が枯れて堆積しながら形成された高層湿原の成り立ちや、限られた養分の中で様々な植物

が共存するメカニズムについて、自生する食虫植物の一種であるモウセンゴケ等を例に学びました。

また、研修の中では鹿などの哺乳類の食害や踏圧の痕跡も見付けながら、それぞれの生物が尾瀬の自然の中でどのように暮らしているのか、生態系の関わりについても考察しました。実際に鹿の生息数急増により、多くの植物が食害を受けているとのこと。日本固有の希少種であるシラネアオイを、食害から保護するための保護柵も観察しました(図2)。これ以外にも、研究見本園では広範囲で植生保護柵が張り巡らされており、食害の影響を実感しました。併せて、山の鼻ビジターセンターでの展示や講義からは、人の踏みつけによる裸地化を防ぐための木道整備や、鳩待峠の入山口に設置された「種子落としマット」の活用による外来種対策、ごみの持ち帰り運動といった具体的な活動について、その背景にある考え方や課題についても深く掘り下げて学びました。人と自然が共存しながら、この豊かな生態系が維持されていることや、生態系維持のための不断の努力を再確認することができました。

今年度の研修成果として、尾瀬の雄大な自然を肌で感じ、その奥深さを知る貴重な機会となりました。尾瀬の具体的な自然保護活動や生態系の事例を学ぶことで、座学だけでは伝えることのできない、生きた環境教育の教材として活用できる知見を得ることができました。今後も、身近な環境から地球規模の課題まで、多角的に考え、持続可能な社会の実現に向けて主体的に行動できる人材育成につながるような研修を企画いたします。



図1 尾瀬ヶ原の植生観察の様子

この講座では、参加者が自身の興味関心に合わせて自由に歩きながら、見て触れて感じることを重要視しています。このような体験型の研修において、広い視点で環境教育を捉えるため、見学・分析・体験という形でのバランスのよい展開に留意しながら、児童生徒に実体験を伴った環境学習を実践するための指導力の向上を図っています。

【研修の概要】

見る・触れる・体験する環境教育研修講座

日時：2024(令和6)年7月26日(金)

場所：尾瀬国立公園

内容：尾瀬国立公園の自然観察

講義・実習

「尾瀬の自然環境について」

講義・実習

「尾瀬の自然保護に向けた取組について」

講師：尾瀬ガイド協会事務局

事務局長 桂田 直樹

【関係業務】

自然・歴史・文化遺産研修

(小・中学校初任者研修)

郷土資源や文化遺産に触れることを通して、郷土に対する誇りと愛情をもつとともに教材的価値についての理解を深める。

日時：2024(令和6)年7月30日(火)

場所：県立ぐんま昆虫の森

内容：「昆虫の森体験研修」



図2 食害保護のための防護柵観察の様子

第2項 環境情報の提供と共有化

1 調査研究の推進、成果の公表 【衛生環境研究所】

衛生環境研究所では、感染症・食中毒などの衛生分野及び水・大気などの環境分野に関する調査研究を実施しています。

このうち、2024（令和6）年度に実施した環

境分野の主な調査研究のテーマは、表2-2-4-7のとおりです。これらの一部は環境省や文部科学省の競争的研究資金を獲得し、実施した研究です。

表2-2-4-7 衛生環境研究所における主な調査研究 ※研究テーマ欄の()内は共同研究機関

	調査研究テーマ	内容
1	災害時における化学物質の網羅的簡易迅速測定法を活用した緊急調査プロトコルの開発 (国立環境研究所、地方環境研究所)	事故・災害時において有害な化学物質の初動時スクリーニングに有効なガスクロマトグラフ質量分析計(GC/MS)による全自動同定定量データベースシステム(AIQS-DB)の構築を目的とした共同研究に参加した。
2	連携プラットフォームを活用した環境流出プラスチックごみの発生抑制に資する研究 (国立環境研究所、地方環境研究所)	環境流出プラスチックごみの調査方法の共通化と実態把握調査を行い、データ共有と発生抑制効果の評価法を検討する共同研究に参画し、各機関の調査方法の実態把握のために行われるデータ集約にあたり、当所から提供予定のデータ整理を行った。
3	PM2.5中の有害有機成分の測定とその影響評価	微小粒子状物質(PM2.5)に含まれる有機成分には、ヒトや環境に悪影響を及ぼす物質が存在し、それらの環境中濃度の実態把握はリスク評価の基礎データとなる。PM2.5中の有害有機成分23種類(多環芳香族炭化水素成分やタイヤ摩耗粒子成分など)の大気中濃度の観測に向けて、文献調査と実試料分析を通じて分析方法を検討し、確立した。
4	バックグラウンド濃度の把握によるVOC等大気汚染物質予測精度の向上と地域排出源による健康リスク評価の高精度化 <環境研究総合推進費> (東京都環境科学研究所、名古屋大学、国立環境研究所)	関東平野をモデルフィールドとし、揮発性有機化合物(VOC)などの大気汚染物質のバックグラウンド(BG)濃度を把握することで、地域の大気汚染対策に資するとともに、大気シミュレーションモデルの精度向上を目的とし、共同研究を実施した。 東京と群馬の都市域と赤城山などのBG地点の通年観測と観測結果の解析を行った。VOCの種類によっては、BG地点でも一定濃度で存在するものが確認され、地域外からの影響が示唆された。
5	光化学オキシダント等の変動要因解析を通じた地域大気汚染対策提言の試み (国立環境研究所、地方環境研究所)	光化学オキシダント(Ox)やPM2.5の観測データを活用し、高濃度化要因の解析などを行い、地域の大気汚染対策を提言することを目的とした共同研究に参画した。 Oxについては、高濃度出現頻度が従前に比べ夏は減少し春は増加していることが確認された。 また、県の大気汚染常時監視局の再配置の検討のためのデータ解析などを行った。
6	ベトナム野焼地域での大気中プラスチック含有微小・ナノ粒子の実態と雨水への移行解明 <科研費国際共同研究強化B> (埼玉大学、国立環境研究所、中央大学、富山県立大学)	野焼きなどによる大気汚染が顕著なベトナムをモデルフィールドに、大気中のプラスチック含有微小・ナノ粒子に係る分析手法を開発し、実態を把握するとともに、雨水移行過程を調査することを目的とする共同研究に参画した。 当所は、大気粒子中の有機成分分析を担当し、プラスチック由来の指標成分の探索や分析条件を検討した。分析手法を開発し国内調査への展開を視野に入れている。

7	大気中粒子状物質とその成分が 間質性肺疾患や膠原病疾患に及 ぼす影響に関する研究 < 科研費基盤研究B > (群馬大学、北海道大学、京都 大学、京都府立医科大学)	大気中の粒子状物質とその成分が間質性肺疾患や膠原病疾患に及ぼす影響を検討し、病因の一端の解明に供することを目的とする研究に参画した。 当所は、PM2.5データ解析を担当し、全国の常時監視PM2.5成分データなどを用いて、PM2.5特定成分の地域特性の解析を行った。
8	気候変動による暑熱・健康等へ の影響に関する研究 (国立環境研究所ほか)	2022(令和4)年から2024(令和6)年を対象に、県内各地の暑さ指数(WBGT)と熱中症救急搬送者数の関係について解析を行った。本県においては、熱中症救急搬送者数は、梅雨明け前のWBGT上昇時、梅雨明け後のWBGT上昇時に大きく増加する傾向にあること、また、高齢者は成人よりも低いWBGTから救急搬送者数が増加することなどの状況が確認された。

2 群馬県環境サポートセンターの運営 【環境政策課】

小中学校や地域などにおける環境学習や環境活動を総合的に支援するため、2003(平成15)年度に群馬県環境サポートセンターを開設しました。

センターでは、環境学習や活動に関する質問や相談の受付、実験器具等の貸出し、情報提供・発信、動く環境教室の運営、環境アドバイザーや子どもエコクラブの活動支援などを行っています。

【概要】

- ・ 設置場所 群馬県環境政策課内
- ・ 設備等 移動環境学習車(エコムーブ号)、実験器具等
- ・ 情報発信 ホームページ(ECOぐんま)、X(@ECO_gunma)

【2024(令和6)年度の利用状況】

- ・ 質問・相談件数 690件
- ・ 動く環境教室利用 89件

3 森林ボランティア等推進 【林政課】

森林環境への関心が高まるなか、多くの方に森林にふれる楽しみと森林整備の重要性を知ってもらうため、県民参加による森づくりを進めています。

県では森林ボランティア活動を推進し一体的な支援を行う拠点として、2014(平成26)年10月に「森林ボランティア支援センター」を開設し、作業時の安全対策・器具の取扱い講習会等の開催、森林整備作業器具の貸出しなどを行っています。

また、企業ボランティアでは、2024(令和6)年度末時点で、「企業参加の森林づくり」で29団体

(30協定)、「県有林パートナー事業」で15団体が森林整備に取り組んでいます。

表2-2-4-8 森林ボランティア団体会員数(単位:人)

年度	R2	R3	R4	R5	R6
会員数	6,036	6,060	5,560	5,560	2,751

表2-2-4-9 企業ボランティア協定締結数

年度	R2	R3	R4	R5	R6
締結数	37	41	42	44	45

4 こども環境白書の作成 【環境政策課】

本県の豊かな自然環境を守り、確実に将来に引き継いでいくためには、次代を担う子どもたちへの環境学習が重要であることから、2004（平成16）年度から環境白書の普及版として、こども環境白書を隔年で作成し、県内小中学校などの教育機関を中心に配布しています。

2023（令和5）年度に作成した最新版では、群馬県の環境などをデータやイラストを使ってわかりやすく整理するとともに、学校での環境学習の副読本として活用してもらうため、主に小学校4年生から6年生の学習指導要領との整合性に配慮した内容となっています。



ぐんまこども環境白書

5 環境情報ホームページ（ECOぐんま）の運用 【環境政策課】

県では、環境に対する理解を深めてもらうことを目的に、2012（平成24）年3月から群馬県環境情報サイト「ECOぐんま」を開設し、県内の環境に関する情報を発信しています。ホームページ内では、環境についてのイベント情報や家庭で取り組める温暖化対策、環境学習・活動の紹介等の様々なコンテンツを見ることができます。2019（令和元）年からは「ECOぐんま」のX（旧Twitter）を開設し、情報を拡散しています。

「ECOぐんま」ホームページアドレス

<https://www.pref.gunma.jp/site/eco/>
「ECOぐんま」X（旧Twitter）アカウント
@ECO_gunma

(1) 掲載コンテンツとホームページ閲覧数

2024（令和6）年度は、県主催のイベントの告知や環境学習資料の掲載などを行いました。また、環境アドバイザーに対して会議の情報や会報も配信しています。本ホームページの閲覧数の推移は表2-2-4-10のとおりです。

表2-2-4-10 群馬県環境情報サイト「ECOぐんま」閲覧数（ページビュー数）（単位：回）

年度	R2	R3	R4	R5	R6
閲覧数	228,479	216,745	223,000	170,251	211,038



群馬県環境情報サイトECOぐんま



ECOぐんまX（旧Twitter）